



歴史教育の指導者

齋藤斐章

齋藤斐章は、明治を目前とした一八六七年（慶応三年）胆沢郡上胆沢佐野村宿（現・水沢区佐倉河字宿）に、陽之進の長男として生まれました。幼名を庫之進くらしのしんといった。斐章の父は江戸で学んだ漢学者で、佐野村で寺子屋を開き漢学を教えていた。斐章は、地元の小学校に学ぶとともに父の寺子屋で学んだ。

一八八八年（明治二十一年）盛岡の岩手県師範学校いわてけんしはんがっこうを卒業し、水沢町の胆沢郡立高等小学校の訓導くんとう（先生）に任命された。しかし、まだまだ学びたいという気持ちから小学校を辞め、東京に行き、磯部弥一郎の英語学校に学んだ。そのころの佐倉河の村長は、小野哲之助で、村の教育に力を注いでいた。胆沢郡の他村に先がけて佐倉河尋常高等小学校を造った。斐章は、その初代校長として迎えられた。教員は、校長である斐章一人だけの学校であったが、佐倉河だけでなく、金ヶ崎や江刺から通学する生徒もいて、四、五十人が学んでいた。

佐倉河の教育に情熱を持って取り組んでいた斐章であったが、さらに自分を磨きたいという思いが強く、二年で校長を辞め、一八九五年（明治二十八年）東京高等師範学校文科に進んだ。すでに結婚をし、二人の子どもの父親となっていたが、東京で学ぶこととなった。

東京高等師範学校（後の東京教育大学、現・筑波大学）には、当時日本一流の教授陣がそろっていた。三宅米吉みやけよねきち（日本史）、那珂通世なかもと（東洋史）、村上真次郎（西洋史）などの教授について指導を受けた。三宅博士は、後に東京文理大学初代校長になった人で、当時の日本の古代史を世界的立場から始めて論証する新しい歴史の考え方を樹立した人物である。優れた先生方の教えを受け、斐章はますます勉強した。夏休みも佐倉河には帰らず、一、二年生のときは、英語学校に、三年生の夏休みはドイツ語を学んだ。夜間も外国語学校に通学し、フランス語などを学んだ。

こうした努力のかがあって、まだ学生ながら、一八九六年〜一八九七年（明治二十九年〜三十年）にかけて、「奈良朝の仏教」と題する論文を発表するまでになった。また、同じ年に、『新体日本歴史初歩』を出版した。

一八九九年（明治三十二年）、東京高等師範学校をすばらしい成

績で卒業した斐章は、東京府師範学校教諭兼訓導となった。郷里の佐倉河から家族を呼び、東京で一緒に暮らすことになった。

一九〇三年（明治三十五年）母校の東京高等師範学校助教諭に抜擢され、主に附属中学校で歴史を担当し、その教授法の開発に力を注いだ。この年、恩師三宅博士の校閲による『歴史教授法』を出版した。これはわが国において最初の理論的歴史教育法を述べた著書であった。

次の年、教授に昇進したが、さらに歴史教授法の研究を行い、一九〇五年（明治三十八年）には『小学歴史地理教授法講義』を出版するなど、わが国の歴史教育の第一人者としての活躍が始まった。特に、附属中学校においては、修学旅行を地理・歴史・博物などの諸学科と関連させ、見学観察させようと考えた。そして、これまでの各学年の旅行案を系統的にまとめた『修学旅行要録』を編纂した。

一九〇九年（明治四十二年）東京高等師範学校教授を兼務することとなった斐章は、二年間のドイツ、フランス、イギリス及びアメリカ留学を命じられた。その間、それらの国だけでなくギリシャ・ローマの遺跡、トルコやエジプトの文化・遺跡など欧米各国の歴史や教育事情を視察した。斐章は、留学中見たり学んだりしたことを細かに記録した見学日誌を残している。それによると、「案内人を

雇わない。自動車を使わない。自分で見学計画を立てて行動しなければ、確かな知識は得ることは出来ない」という考えで行動したことが読み取れる。

斐章は帰国後、ベルリンのデウムラー書店からドイツ語で書いた『日本史』を出版した。この本の中で、武士道を強調し、武士道は日本の精神であって、根本的な道徳体系であると述べている。ちょうど日露戦争（一九〇四～五年）直後のことだったので、欧米人の日本に対する関心が強いときだけに評判となり、すぐに英訳やスウェーデン語にも訳され、日本をヨーロッパに紹介する最初の著書となった。またこの留学で学んだことや体験したことをもとに『西洋文明史観』という大作を出版し、歴史を「世界史」という視点から学ぶことの大切さを広めた。

一九一三年（大正二年）には、文部省視学委員、東京高等師範学校教授兼教諭に任命され、以後一九二〇年（大正九年）までに歴史教授法や『日本国民史』などの大作を刊行するとともに、各種の論文を発表するなど、歴史教育者として活躍した。

一九二七年（昭和二年）には、全国の中等学校に先がけて東京高等師範学校の附属中学校に公民科（いまの社会科の前身）を新設した。一九二八年（昭和三年）には、全国の師範学校及び高等学校の

地理や歴史科の教員に呼びかけ、わが国最初の中等学校地理歴史科
教員協議会を結成し、世界史の重要性を訴えた。このように歴史教
育の先駆者として精力的に活動し、名声を高めた。

斐章はその生涯において、著書と共著は五十数冊、雑誌に掲載さ
れた論説は三百を超えるというおびただしい数の著作や論文などを
発表し、生涯にわたって歴史教育ひとすじに、情熱をつらぬいた。
特に、昭和十一年少年少女向けに書いた「高野長英と渡邊崋山」は、
岩手県人に勇気を与えた。

一九四四年（昭和十九年）歴史教育に偉大な足跡を残したその一
生を終え、七十七歳で亡くなった。

斐章は、佐倉河の地に建てられた自ら撰文した「戊辰役記念碑」
と、今も歌い継がれている「佐倉河小学校校歌」とともに、地域の
人々の心の中に生きていく。

*参考文献

- 『岩手の先人 第三集』 日本教育界岩手字調査研究部会
『歴史と観光 みずさわ浪漫』 水沢市・水沢市観光協会
『水沢市史』 水沢市



佐倉河小学校に建つ校歌と顕彰碑